音楽科研究主題

聴取活動による音楽的な感受を基にした，思考力，判断力，表現力等を高める授業づくり

～我が国の伝統音楽を教材とした表現活動について～

小林　美佳

１．主題設定の理由

音楽科の学習活動では，聴く活動の中で「知覚・感受する」ことが重要である。それを基に「A表現」においては，生徒は自分自身と向き合ったり，仲間と交流したりすることで，様々に試行錯誤しながら，思いや意図をもったり，思いや意図を深めたり広げたり，技能を身に付けたりして音楽表現をする。また，「B鑑賞」においては，仲間と批評するなどの活動を通して，自ら価値判断し，音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようになっていく。

このように，音楽の授業では，「A表現」の学習においても聴取活動を行うことが生徒の思考を促したり深めたりし，音楽表現の工夫につながることが重要となる。例えば歌唱では，曲に対する自分のイメージを膨らませたり，他者のイメージに共感したりしながら表現の工夫を考える。生徒は，強弱や速度などの要素の働きを基に音楽の特徴を捉え，「こんなふうに表現してみたい。」などと自らの思いや意図をもつようになる。その際，生徒たちに学習の過程を踏まえ適切な聴取教材を聴かせることで，「こんな表現方法もあるのか」などの新たな発見をし，さらによい表現を求めて工夫するようになる。創作では，身近な楽曲を聴いたり，他の生徒の作品を聴いたりすることで，自分の作品づくりのためのアイデアが生まれたり，自分の作品を見直す視点を見出したりすることができる。聴取活動を授業の中に効果的に位置付けることで，相手が伝えようとしている表現の工夫を知覚・感受する力の向上も期待できる。音楽を表現する技能だけではなく知覚・感受する力も合わせて高めることで，生徒の思いや意図は深まり，さらなる音楽活動の充実を図ることができると考えた。

本研究では，生徒が思考・判断・表現する力を高めることにつながる，効果的な聴取活動の在り方を探ることを目的とする。そのために，歌唱・器楽・鑑賞の各領域や分野を関連付けて取り組むことのできる授業を構成し，聴取活動をどの場面でどのように位置付ければ効果的であるかを明らかにしていきたい。

２．これまでの研究のあゆみ

平成２６年度から２８年度までは,『自分の思いや意図を音で表現できる力の育成～聴く活動から感受し，表現する授業をとおして～』という主題のもとで，研究を行った。平成２５年度までの研究を踏まえ，聴取活動に重きをおき，全体研究主題『「深く考える」授業の創造』の実現を目指した。

全体研究を受け，音楽科でも「深く考える」授業についてさまざまな実践を積み重ねてきた。１年目・２年目は主に創作の分野で，そして３年目は歌唱と器楽の分野で授業を構成した。３年間実践して感じたことは，「視点を変える」活動の有効性である。特に音楽科では「教師から与える視点」が重要であると考える。音楽の授業では，他者との交流はこれまでも当たり前に行われてきた。グループ活動でも，個人活動でも，最終的には表現することが必要とされる教科である。何かしらの形で，人に伝えることが必要となる。他者の演奏を聴いて感じたことが，自分の演奏に生かされたり，意見をもらうことで，新たな可能性に気づいたりと，大きな効果を得ることができる。しかし，生徒同士の意見交換では，音楽で交流することよりも話すことに重点が置かれてしまう。また，求められた意見がどうしても的を外れてしまったり，なかなか意見が出なかったりすることもある。

その点，教師から視点を与える場合には，ねらいに則した内容を提示することができる。例えば，平成２７年度の創作の授業では，創作につかえる音楽的観点を少しずつ与えていく，という方法をとった。そのたびに教師が見本を提示し，生徒がその観点を聴き取ることで興味・関心をもてるよう工夫した。新たな視点が加わることで，音楽の世界が広がり，生徒の意欲も増していく。何とかして新しい観点をつかってみようという生徒の思いが，作品にも表れ，ワークシートの記述からも見てとれた。

平成２８年度の長唄の授業でも，講師から模範が示され，それを聴きとることで，生徒は「長唄らしさ」とは何かを考え，自分たちとの違いに気づき，そしてそれを表現に生かそうと試行錯誤

していた。まさに，音楽科が目指す「自分の思いや意図を音で表現する」ことを実践しようとしていた。教師から適切な視点を与え，生徒の活動を促すことで，「深く考える」授業となっていくのではないだろうか。生徒が楽しみながらも，試行錯誤を繰り返す様子は，「深く考える」ことができている状態であったと考えられる。見とりに関してなど，まだ課題はあるが，これからも生徒が生き生きと活動できる授業を構成し，実践していきたい。

３．全体研究との関わり

平成２９年度から全体研究では『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という主題を設定し，３年計画で研究を行っている。初年度は「見方・考え方」を生かした学びについて各教科で研究を進めてきた。

（1）音楽科における「見方・考え方」について

新学習指導要領や「中教審答申」から，全体研究で目指す「新たな世界を主体的に創造する生徒」を育成するために，音楽科で重視すべきことは，「生徒の知性と感性の両方をいかに働かせ，音楽の学びにつなげるか」であると考えた。つまり，『音楽科における「見方・考え方」を働かせた学び』とは，『知性と感性を働かせて対象や事象を捉えることで，創造性を育むこと』とも考えられるのではないだろうか。

では感性が働いているとは，どのような状態のことを言うのだろうか。音楽的な「見方・考え方」の内容を改めて見てみると，音楽科がこれまで取り組んできたことと大きな違いがないように感じられる。これまで工夫してきたことを，さらに進化させ充実させることが求められているのではないだろうか。音や音楽に触れたとき，さまざまなイメージや感情が湧く。「すてきな曲だな」「これは何の音だろう」「この曲はあまり好みではないな」などと感じているときの心の動きが，感性の働きだと考えている。そう考えると，感性の働きなくして，音楽の学習活動は成立しない。ただ，生徒がより感性を豊かにし，主体的に音楽の学習活動に向き合えるためには，授業での発問や教材の工夫が求められる。感性を働かせるために，生徒が意欲的に活動することのできる「音や音楽との出会い」を大切にしていきたい。そして，音楽科の研究主題との関連を意識し，聴取活動による音楽的な感受をもとに，感性をより働かせる学習過程を授業において実現することを目指して研究を進めていきたい。

（2）「見方・考え方」を働かせた学びを通して，音楽科で目指す具体的な生徒の姿

「中教審答申」では，音楽科における，資質・能力を育成する学びの過程についての考え方として，「音や音楽との出合いを大切にし，音楽活動を通して，音楽を形づくっている要素を聴き取り/知覚し，感じ取って/感受して，音楽的な特徴と，音楽によって喚起される自己のイメージや感情，音楽の背景などと関連付けることを，表現及び鑑賞の学習において共通に位置付けた。」としている。

これらのことから，「見方・考え方」を働かせた学びを通して，音楽科で目指す具体的な生徒の姿について次のように考えた。

〇さまざまな音や音楽との出会いを大切にし，それぞれの伝統や文化を尊重し，音楽活動を楽しむ生徒。
〇音楽を聴いたり演奏したりすることで知性と感性の両方を働かせ，知覚・感受したことを自分なりに表現したり，仲間と学び合ったりして新たな意味や価値などを自覚することのできる生徒。

音や音楽との出会いは「聴くこと」から始まる。初めて耳にした音や音楽に対して，「これは何の音だろう」「どんな楽器で演奏しているのだろう」「何を表現しているのだろう」などと感じるところから，生徒の感性は働き，音楽の表現活動や鑑賞活動につながっていくのである。そのためにも，これまでと同様に，生徒が興味・関心をもてるような題材設定が必要である。また，生徒が普段あまり接することのない分野の音や音楽との出会いを与えることも，知性と感性の両方を働かせるためには重要である。さまざまな分野の音や音楽に触れることが，豊かな音楽経験となり，自分なりの表現の工夫や価値判断につながるのではないだろうか。

音楽科の研究主題とも関連させながら，上記のような生徒の育成を目指して，授業を構成していきたい。

４．平成２９年度の研究から

音楽科では，「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を構成することで，「音楽的な見方・考え方」を働かせた学びの実現を目指してきた。これまであまり触れることのなかった分野の音楽に出会い，新たな音楽経験を積むことで，生徒の感性を働かせることができると考えた。また，生徒が既有の知識を生かして対象を捉えようとすることで，知性の働きを促すことにつながるのではないかと考えた。

平成２９年度の授業では，主に聴取活動と歌唱教材の設定について工夫を行った。聴取活動においては，講師による模範演奏の聴取を行うことで,生徒に長唄の発声と西洋の発声の特徴を捉えさせた。講師による演奏の利点として，声を直接聴くことができるだけでなく，歌唱している姿を見ることで，身体の使い方や呼吸の仕方などについても理解できることが挙げられる。講師が演奏したときの生徒の反応を見る限り，生徒が題材や教材に対して深く興味を示したり，学習意欲をもったりする効果があると考えられる。授業後のワークシートには，生徒が講師の声に新鮮な驚きを感じたことがわかる記述が多く見られた。講師と連携した授業づくりは,「見方・考え方」を働かせた学びに対しても有効であると実感した。

講師との連携は，授業当日のみ行うものではない。むしろ，授業づくりの段階での事前打ち合わせのほうが重要であると考える。講師と授業について話し合い，教材と向き合うことで，同じ目的をもって授業を行うことができた。また，講師がお客さまのように扱われるのではなく，学校の教師と同じように指導者の立場として，生徒と関わることができたと感じている。

最後に，日本の声と西洋の声それぞれのよさをまとめる活動を行った。今回の授業をとおして生徒は，自分なりに長唄とドイツリートのそれぞれのよさや違いを発見し，工夫して歌唱表現することの楽しさを知ることができたように感じている。

５．平成３０年度の具体的な研究内容とまとめ

２９年度の反省を受けて３０年度は２年生を対象に,器楽を中心とした授業を構成していくこととした。本研究では，聴取活動を効果的に取り入れることによって，生徒の思考力，判断力，表現力等を高めることを目的としている。それに加え,「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を，３年間で系統立てて構築していきたいと考えている。初年度，声や唄について学んだ生徒たちが２年生となり，器楽を中心とした「我が国の伝統音楽」と出会う。そして３年生となる３１年度は，唄と三味線どちらも自分たちで楽しんで演奏できるようになることを理想としている。

また，全体研究２年目では「資質・能力」を見取るための評価の工夫についての研究を行うことから，全体総論にあるように,「生徒の資質・能力の形成の過程を捉え，教師は指導と評価の一体化に生かし，生徒は自らの学びを自覚できるような評価方法を検討」していかねばならない。

音楽科ではこれまでにも生徒の活動や思考の変容を見取る方法として，生徒の活動の様子を映像に残すことや，活動中に考えたことを書き留めさせることなど，記録方法の工夫を行ってきた。生徒が考えたことや表現しようとしたことを，いかに顕在化させるかが評価を行う上で重要であると考えている。

これまでは，主に教師が生徒の様子を見取ることを目的に評価方法を検討していた。今後は生徒が自らの学びの過程や到達度を振り返り,次の学びに生かすという視点をもって研究していきたいと考えている。

以上のことから，３０年度の研究重点を以下のように設定した。

○前年度の実践内容を踏襲し，聴取活動を行うことで生徒の気付きを促し，それを基にして実技指導へとつなげる授業実践を行う。
○器楽の指導に当たっては，音色や奏法の違い等を聴取させることで，聴く力を高めるようにするとともに,「我が国の伝統音楽」についての興味・関心を高め，理解を深められるようにする。
○我が国の伝統音楽を教材とした授業の評価の在り方について検討する。そのために，グループ学習等における生徒の表現活動の様子について，言葉だけではなく，音声や映像など含めた記録を残す。それらの記録を活用して，生徒の思考の変容や，思考力，判断力，表現力等の高まりについて捉えていく。

※本校音楽科で高めたい「聴く力」とは

音楽を聴いて強弱や速度などの要素を知覚したり，それらの働きによって生み出される特質や雰囲気を感受したりする力だけでなく，自ら価値判断し，音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる力などを総合して定義している。

（1）３０年度の授業づくりを振り返って

３０度は前述した研究重点を踏まえ，２学年で器楽を中心とした授業を構成した。聴く力を高めるための聴取活動をもとに実技に取り組むことで，生徒が実感を伴って理解できる授業を目指してきた。また,「我が国の伝統音楽」への興味・関心を高めるため，２９年度の歌唱の授業をもとにして系統的な内容を取り入れた。

具体的には，三味線の音色に特化した授業を構成した。特に１時間目の授業内容は，教師が教えてしまえば半分以下の時間で学習できてしまう内容である。しかし，それでは実感を伴った理解に至るとは考えにくい。どれだけ生徒の記憶に残る授業になるかについても疑問が残る。昨年度の内容が，一年経っても生徒たちの印象に残っているのは，それだけ新鮮な驚きや発見があったからではないだろうか。今回も聴取活動を効果的に取り入れることで，生徒が学びたいと感じるような授業を目指した。

本校音楽科で高めたい「聴く力」は前述したとおりであるが，今回の聴取活動では三味線の音色は「きれいな音」なのかという問いをもとに，さまざまな楽器の音色と比較しながら特徴を捉えさせた。雑音の少ない澄んだ音が「きれいな音」だという生徒の考えに，新たな視点を与えられるよう工夫した。

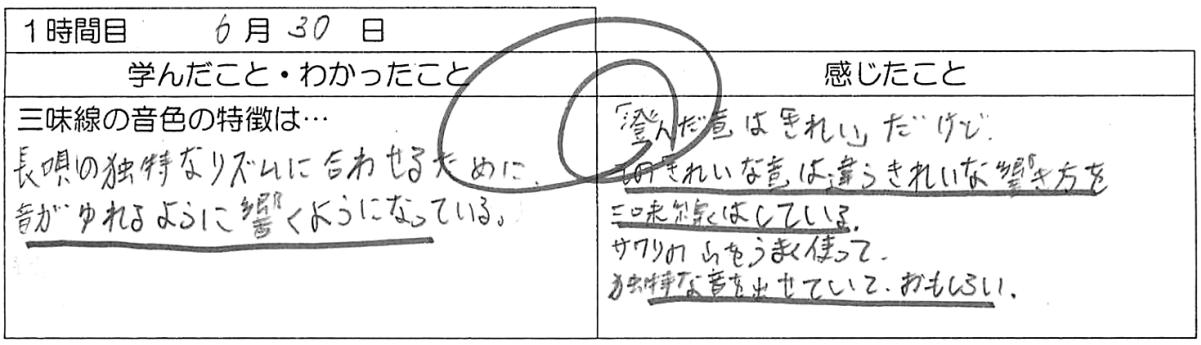
教師が三味線を弾いて出す二つの音色を聴き，響きの違いを感じ取るとともに，どうやったらその音色が出せるのかを生徒自身に考えさせた。全員に三味線を与え，何も知識のない中で工夫して音を出す時間を多く設定し，生徒が試行錯誤する過程を大切にした。楽器の構え方さえ知らない生徒たちは，真剣に課題と向き合い，仲間と相談し合いながら活動していた。「(糸を) 押さえると変わるよね」「でも先生は音の高さを変えていなかったのに，押さえると変わっちゃうよ」「はじき方が違うのかな」といった生徒のつぶやきを拾い，全体で共有することで学びが深まったように感じた。昨年度の全体研究で重視した「音楽的な見方・考え方」を働かせた場面だと言える。この後サワリという新たな知識を教師から与え，三味線独特の音色を生み出す秘密を知ることで,「我が国の伝統音楽」に対する生徒の興味･関心はさらに高まった。

始まりは「きれいな音」かどうか，という問いかけであったが,「きれいな音」の定義はさまざまであり，ギターにしかない音色の特徴やよさ，三味線にしかない音色の特徴やよさがあることを，生徒は理解することができたと感じている。最後の振り返りの場面でも，全員がそれぞれ自分なりに三味線の音色の特徴を表すことができていた。音色の特徴を言葉で表現することは，中学生にとっては難しい課題であると思われる。生徒の記述の中には，絵や図を用いて説明しているものや，擬音語を多用しているものなどが見られた。これらの記述も,「音楽的な見方・考え方」を働かせた姿であると捉え，大切にしていきたいと考えている。評価にもつながる部分ではあるが，言語化させることが授業の目的ではないので，生徒の実態に合わせて指導していきたい。

（2）資質・能力を見取るための工夫について

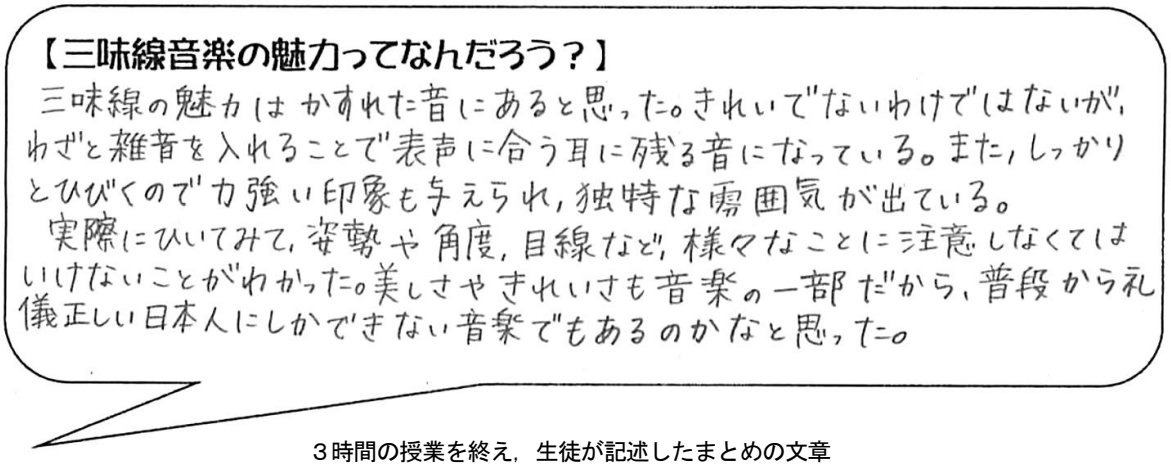
音楽科では，資質・能力を見取るための工夫として,「振り返りシート」を題材ごとに一枚用意し，記入させた。これまでは，ワークシートの中に数か所記述する欄を設け，一時間ごとに新しいシートを配付することが多く，生徒も教師も負担感が強かった。そのため，できるだけ生徒が授業の中で記述する時間を増やさず，音楽を聴いたり演奏したりする活動に多くの時間を割きたいという思いがあった。

今回活用した振り返りシートは，一時間ごとに今日の授業で「わかったこと」と「感じたこと」を記入させ，題材の最後にまとめの文章を記述するように構成した。授業の終末３～５分を記入の時間に充て,「もう少し書きたい」という生徒は持ち帰って次の時間までに提出する形をとった。器楽だけでなく，歌唱や鑑賞の授業でも同じ形式で振り返りを行うことができ，これまでよりも効率的に生徒の思考の様子を捉えることができるようになった。歌唱の授業などでは，活動のみで終わってしまうこともあったが，必ずその時間に学んだことを振り返るようになり，生徒が自らの様子を顧みることや教師が生徒の理解度を把握することもできるようになったと感じている。



1時間目　6月30日	
学んだこと・わかったこと	感じたこと
三味線の音色の特徴は… 長唄の独特なリズムに合わせるために、 音がゆれるように響くようになっている。	「学んだ音はきれい」だけど、 このきれいな音は違うきれいな響き方を 三味線はしている。 サワリのようをうまく使って、 独特な音を出せていて、おもしろい。

「振り返りシート」　１時間目の記録



【三味線音楽の魅力ってなんだろう？】

三味線の魅力はかすれた音にあると思った。きれいでないわけではないが、わざと雑音を入れることで表声に合う耳に残る音になっている。また、しっかりとひびくので力強い印象も与えられ、独特な雰囲気が出ている。

実際にひいてみて、姿勢や角度、目線など、様々なことに注意しなくてはいけないことがわかった。美しさやきれいさも音楽の一部だから、普段から礼儀正しい日本人にしかできない音楽でもあるのかなと思った。

３時間の授業を終え，生徒が記述したまとめの文章

６．今年度の具体的な研究内容

研究最終年度となる今年度は，継続して見取りの方法について研究を行うとともに，学習指導要領の移行期間に伴って教育課程の改訂を進めていきたい。具体的には，全体研究で提案された２つの研究重点（①教科研究の深化、②教科等横断的な教育課程の編成）をもとに、音楽科としての研究重点を設定し、３年間を系統立てた「我が国の伝統音楽」を教材とした授業の構築について，成果や課題をまとめていく。前述した昨年度までの研究の成果と課題を踏まえ、今年度の音楽科研究重点を以下のように設定した。

○第３学年での授業実践を行うことで、３年間を系統立てた「我が国の伝統音楽」を教材とした授業についてのまとめを行う。
○様々な「我が国の伝統音楽」を教材とし、生徒がこれまで高めてきた聴く力を生かし、それぞれの違いや共通点などを学ぶことを通して、思考力・判断力・表現力をより高めることのできるような題材設定を行う。
○我が国の伝統音楽を教材とした授業の評価の在り方について、あらかじめ教師が具体的な生徒の姿を想定し、観察のポイントを明確にするなど、よりよい方策を検討していく。

また、全体研究の重点②を受けて、今後施行される３観点での評価などを踏まえ，教科の特性に合った形の「年間指導計画」の作成を進めていく。この年間指導計画の中では、総合的な学習の時間（本校では「SELF」）との関連についても意識している。本校では第３学年において、SELF で卒業研究として個々の興味・関心に応じた探究学習を行うことから，音楽科でも「我が国の伝統音楽」を教材とした授業のまとめを通して，生徒にテーマ選択のきっかけを与えていきたいと考えている。

〈引用・参考文献〉

・中学校学習指導要領　文部科学省　H20
・中学校学習指導要領解説　音楽編　　文部科学省　H20
・中学校学習指導要領　文部科学省　H29
・中学校学習指導要領解説　音楽編　　文部科学省　H29.6
・評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校　音楽）
H23　国立教育政策研究所　教育課程研究センター
・山梨大学教育人間科学部附属中学校研究紀要　H23~27
・山梨大学教育学部附属中学校研究紀要　H28～30
・中央教育審議会　「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」　H28.12　文部科学省
・中学校新学習指導要領の展開　音楽編　H29　副島和久編著　明治図書
・中学校教育課程実践講座　音楽　H30　宮下俊也編著　ぎょうせい
・中央教育審議会　「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」　H31　文部科学省